

## 1981 年度学会賞受賞作品・授賞理由

---

### ◆石川賞「一連の国際的活動」

佐々波 秀彦(国連地域開発センター所長)

〈選考理由〉

佐々波秀彦氏は、国連名古屋地域開発センターの設立や国際地震工学研修所の設立等に助力されるとともに、I.F.H.P.の日本代表、O.E.C.D.環境開発委員会日本代表等、都市計画分野における国際交流に精力的活動をされてきた。また海外事情についての豊富な知識を基に、「欧米の都市開発」等の著書や「西独の地域・都市・住宅開発」「米国の地城・都市開発政策」「スウェーデンの都市計画制度と土地問題」等これまで多くの紹介をするとともに、翻訳等を通じて、わが国の都市計画分野における啓蒙的な功績が大きい。特に昭和 55 年名古屋にて開催された国連大都市問題会議については、ジェネラル・コーディネーターとして、同会議の準備段階から、会議の開催、更に昭和 56 年にまとめた会議報告書は、内外の専門家からその成果を高く評価されている。

以上、同氏は、都市計画に関する国際的交流、並びに学術研究の紹介、更には国際協力機関の設立等、多くの業績を積み重ねてこられ、国際化の先駆的役割を今日も尚続けられており、そのユニークな活動は、石川賞に値するもので、審査員一同推薦する。

### ◆論文賞「都市構造と緑地・オープンスペースの構成に関する一連の研究」

田畑 貞寿(千葉大学園芸学部助教授)

〈選考理由〉

緑地計画の立場から都市的土地利用の在り方を探る研究として、従来、公園緑地の必要量、配置論からの接近が多かったが、本研究は都市施設としての緑地の問題にとどまらず、オープンスペース全般および緑の内容のレベルで、それらの存在態様

を解析し、緑地・オープンスペースのシステムと地域構造との関係を究明した一連の新しい試みである。

この研究の基礎は、人口密度と都市オープンスペースの構成との関係から出発しているが、その後、緑被地の概念を用いて、都市化に伴うその変遷退程の分析、流域システムの中での位置づけ、屋外レクリエーション地としての利用可能性を追求するとともに、屋外共用空間としての緑被地を計画・管理していくこと、そのための市民参加の方式の提示、さらには公共空間に占める諸物 space paraphernalia を含めた都市のグリーン・マトリックス手法の展開まで広範にわたって、実践を通し実証的に研究してきたものである。これはいわば都市域の生態学的計画論ともいえるものである。

都市緑地環境の整備のために都市計画的対応が求められている今日、都市政策的にも指針となるべき成果を提示していることを評価し、論文賞としてふさわしいものであると考える。

## ◆設計賞「高陽ニュータウンの設計と建設」

竹下 虎之助(広島県 代表 広島県知事)

〈選考理由〉

地方都市の住宅市街地開発における地方公共団体の果した業績はすこぶる大きい。この中であって本計画は、昭和 42 年広島県住宅供給公社を事業主体として、広島都市圏開発の一環となる好環境の住宅市街地の開発と、周辺集落を含む一体的街づくりを行うという基本理念のもとに、事業が進められ、このほどほぼ完成した。

本計画の特色は、まず第1に単なる住宅地開発でなく、周辺集落の区画整理再編、新住宅地による地域全体を考慮した施設整備、周辺との一体化のための街路、歩専道の計画が行われ、とくに住宅地開発に土地区画整理を併行させ、地域開発手法上の先鞭をつけた点は高く評価される。第2に「土地利用上、自然資源の保全をはかるのみでなく、歩車道の完全分離、歩専道、緑道による地域関連公共公益施設連結システムを構成し、土地利用および施設利用面での連続的一体化がはかられ、計画技術上すぐれた点がみられる。第3に中央部に計画されたタウンセンターは公益広場

(プラザ四季), 自由広場, 運動公園からなり, 地域の核として現行建設中である。とくにプラザ四季は昨年9月完成し, 広場空間構成, 色彩計画など高度の技術水準がみとめられる。また地下駐車場は, 当初計画により, 一般造成事業に含めて建設され, この点は他に例のないものである。

以上本計画は、住宅地開発における開発手法上多くのユニークな特色をもち, 今後の住宅地開発に寄与するところ大である。ここに広島県都市部, 広島県住宅供給公社を代表して, 広島県知事に設計賞を贈るものである。

なお, 昭和43年度石川賞受賞者である大庭常良氏(工学院大学教授, 宅地開発研究所代表)は本計画の設計計画を担当し, その業績は大であることを付記する。

#### ◆論文奨励賞「都市における古町割制市街地の変容と再編に関する研究」

藤井 治((財)関西情報センター)

〈選考理由〉

本論文は都市変容の基底構造として市街地形成に制約を与える土地分割形態に視点を置き, その基底構造としての古町割を定義付けるとともに, 京都, 大阪の古町割制市街地を対象に, 古町制度市街地における町制の構造, 市街地の集合秩序, 古町割の実態とその変容過程, 古町割制約下における市街地の更新実態, 市街地集合秩序の崩壊について, 文献資料, 実態調査を通じて市街地変容のメカニズムとそこに内在する環境上の問題を実証的に解明し, これをもとに古町割制市街地の整備再編上の課題および技術的制度的手法を展開しているものである。

本論文における古町割制市街地の変容についての実証的研究は, その類形化を含めて独創的な研究であり, 論旨, 研究の進め方, 調査方法など明解ですぐれている。再編整備に関する提言のなかには, 若干考察に不十分な点も見受けられるが, 今後の研究に期待したい。

本論文は今後の市街地整備計画, 居住環境整備計画の研究に一つの方向性を与えるもので, 日本都市計画学会論文奨励賞に値するものと考えられる。

#### ◆論文奨励賞「地域開発の過程論的研究」

肥田野 登(東京大学工学部講師)

《選考理由》

本研究は、広域圏における長期にわたる各種施設の整備過程を、多様な制約条件の下で、開発速度の概念を導入し、それらの最適化のあり方を、理論的、実証的に明らかにしようとしているものである。

その特徴は、開発速度(単位時間当りの開発量の時間的流れ)をパラメーターとすることにより、現実と最適状態の間をつなげる方法論を見出しつつあること、また、地方公共団体等の施設整備力の拡大を内生化した多種施設整備モデルの構築をはかることに努めていること等があげられる。

これにより、地域開発計画策定における不確定性下の最適整備過程の安定性を明らかにする方法論、例えば、より実現性の高い施設整備過程は、生産、生活施設をバランスよく整備する過程につながる等、豊かな計量、解析を駆使して解明されつつあることは、今後の地域開発のあり方における新しい萌芽になりうると考えられる。

地域開発の命題が、資源開発、産業基盤整備、地域抗差是正、国土利用再編成、そして定住的社会開発に移行しつつある現在、多様、かつ質のたかいものが求められている。この研究が、これらの命題に向い、さらに船出することを期待し、論文奨励賞として推薦するものである。